
転生先は.....リリカルでマジカルなの.....

555

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生先は……リリカルでマジカルなの……

【Nコード】

N 6 1 4 3 Z

【作者名】

5 5 5

【あらすじ】

ある日俺は3人組の小学生の女子共を助けて死んだ、そして気付くと死後の世界に居た。俺はどうやら転生させられるそうだが、でも普通の日常にチートなんか必要なくね？と考えたが、うん結論から言うとチートになっちゃった。てな訳で俺は原作ブレイクとか介入とかしないから

これは作者の暇潰し兼練習の処女作です。よって亀更新、駄文、グダグダの三拍子整った糞作品です。それでも良いと言う心の器が広い方のみどうぞ

俺は普通の日常に転生する事になった……………よね？

「で、ここどこ？」

何も無い空間で俺は気が付くと寝転がっていた。

「お主、ちつと寛ぎ過ぎじゃね？」

「おう爺さん、ここ何処よ？あんた誰？」

俺は目の前に現れた爺さんにここが何処か聞く事にした。

「ここは死後の世界。つまりお主は死んだんじゃ」

「ふゝん」

「いや…ふゝんって……」

別に疑っている訳じゃ無い。確かに俺は死んだからな。確か俺はあの馬鹿共が車に轢かれそうだったから突き飛ばして俺が身代わりになった筈だからな。

「でお主には転生してもらつ」

「え…やだ…」

「え？やなの？」

「首傾げんな気持ち悪い」

「ガーン」

実を言うと凄く眠いんだ俺。転生？知らないねそんな面倒な事なんかには付き合えるか

「本当にお願います！！！」

なんか土下座して来たんだけど。神様が。

「と、取り敢えず理由を聞こうか？」

俺は理由を聞く事にした。神様が言うには俺が突き飛ばした3人組の女子は本来事故に遭遇する筈は無かったらしい、つまり神様の書類ミスで彼女達は死まう所を俺が助けて俺のやった事が天界では受けが良かったらしく俺を転生させてくれるらしい。でも転生をさせなかったらこの神様はクビらしい。

「はア。わかつたよ」

「本当かの!？」

「ああ、やってやるよ」

「では転生する際の特典を3個まで授けよう」

「いらねー」

「へ?チートでも何でも良いんじゃないぞ?」

「だって平穩に暮らすのに武器なんかいるか?」

「だ、だがな……」

「じゃあ、俺の生前の家族の幸せと俺が助けた奴等の幸せとクラスメイトの幸せを保証してくれればいい」

「そんなの力を使わない位簡単なのじゃが……」

「言われてもなあ。どの世界に行くのかも知らないし

「じゃあ、どの世界に転生するんだ?」

「うむ、リリカルなのはと言う世界じゃ」

アニメか?俺そう言うのあんま見てないんだよな。ガンダムは見たけど。

「うーーーーーん……」

それから俺は二時間考え込んだが何にも欲しい物が浮かんで来なかった為取り敢えず神様に全部任せる事にした。その為なにやら天界の神様が全員集まって会議をしているらしい。人間1人に大げさな。

「では、あの転生者の人間の魔改造を始める。では神様1君、彼の望みは?」

「はい、あの人間の望みは自分の傍の人間の幸せだそうです」

「欲が無いの?」

「前の転生者なんて凄いいチートだったのにね」

「なんだっけ?王の財宝と魔力SSSオーバーとイケメンだっけ?」

「デブのキモオタだったらしいよ?」

「あー、確かに笑い方がフヒヒだったからねー」

「あれ？アイツの担当って神ちゃんだっけ？」

「そだよー。でも今回の子は将来可愛い男の娘になるだろうねー」
「ねー」

「ゴホン、では魔改造は此方で仕切ろうか」

と言う事で何だかんだで決ったのが以下の通り。

・魔力ランクEX
・デバイスは超高性能のインテリジェントデバイスを一つと超高性能ユニゾンデバイスを一つ

・主人公の生まれは大分不幸。（中二病の神5が提案した）

・容姿は男の娘。（神ちゃんの趣味）

・レアスキルとして東方風に『何でも出来る程度の能力』を付加

・宝具などの武装系統は全て王の財宝に格納済み及び射出可能

・身体能力と知能は最高ランク

・アカシックレコードのアクセス権を取得

・演算システムヴェーダのアクセス権を取得

「オイ」

「どうしたんじゃ？」

「普通の日常にしてくれるんじゃ？」

「知らんのう。では行って参れ」

「……………は？」

そして行き成り俺の足元は宙に浮かび上がる。

「こおおおんのおおお糞爺iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

そして俺は落ちて行った。

俺は普通の日常に転生する事になった……………よね？（後書き）

どうでしょうか？

自分には文才が全くと言って良い程に無いので誰かアドバイスを下さい。

感想と罵倒是非とも御待ちしております。

あの、ぼく、転生しました……………物凄く不幸ですけど……………

どうも、先日転生した者です。えーと現在5歳です、そして物凄く不幸です。何があったかって？じゃあ簡潔に説明しよう。

・僕、ミッドチルダにて爆誕する（笑）

・僕の両親いきなりログアウト。管理局の仕事の際事故で死んだっぽい

・後日家に黒服の男の集団が押し掛けて来る、そして僕が聖王のクローン体と知る

・色々バイ実験される。四回死に掛ける

・研究所に管理局員が攻めて来る。僕は街に放り出される

・街を彷徨っている。残金210円。↑今ここ

て訳だ、……………どうしようorz

てか管理局員アホ過ぎだろ！？なんで僕見てスルーしてどこか行っちゃうの！？

はあ、マジでどうすんの？俺は一生を210円で過ごさなきゃいけないのかよ……………

「マジでどうすつか。こうなりや魔法でも身に付けて見るか」
と言う事で思い付きで練習してみた。公園で。

結果は大成功。3日で大抵の初歩的な魔法は直ぐにでも撃てるようになった。公園のゴミ箱漁ってミッド式魔法初級編を拾わなかったら何にもならなかったがな。

それと魔法の修行の過程で『何でも出来る程度の能力』が使えるようになった。でこれでお金を創ろうとしたら何か出来なかった。何故……………orz

と言う事で所持金150円なので今日も、もやしを買いに行こうと思います近所のスーパーに行こうと思います。

少年移動中

という訳で着きました。それと今気付いたんですが、時期はSts
なんですね、街で金髪の……誰だっけ？まあ良いやそれとあの魔王
様が表紙の雑誌を見つけました。

「もやしもやしと、あった。ん？うお！すげえ！もやしが一袋十
円だって！？」

と言う事でもやしを15袋買いました。よし！所持金は0だけど
食料は一杯確保したぜ！

よし！早速帰ったら調理だ！

少年移動中

忌々しい嗚呼忌々しい。え？何があったかって？それが自分の公園
のベンチ（マイホームとも言っ）に帰宅したらピンクの髪の美少女
と赤髪のイケメン野郎がイチャイチャしてんですよ。あ、別に嫉妬
って訳じゃ無いですよ？僕だって本気出せば女の子の一人位楽勝で
すよ？

話が逸れましたが取り敢えず僕は先にもやしを調理しようと思いま
す。

少年の三分クッキング？開始！

まずもやしを袋から出します。

そして水で洗い蒂を全部筆ります。

そのご袋に戻して

終了です

少年の三分クッキング？終了！

え？もう終わりがあって？当たり前じゃないですか、火も無いですし
魔法なんて使って管理局に保護される……なんて……

「いごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「ちよ、ちよつと！？どうしたの！？」

僕の素晴らしき土下座を披露すると声的に金髪の美女が此方に降りてくる。ヤバイ！殺される！！

「ごめんなさい！謝るのでどうか痛くしないで下さい！！！」

僕の土下座＋命乞い＋頭の上下運動で必死に許しを乞う。あ、ヤバイ。頭が割れる、血も出てきてる。一旦やめて二人の様子を見ようと顔を上げると

「だ、大丈夫？」

と僕に手を差し伸べる魔王様、普通は考えてこれは許してくれたと思うがそれじゃ駄目だ。なにせ魔王様の特技は砲撃魔法で趣味は砲撃を人に撃つ事だ。だから安心してはいけない。よって俺の行動は「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

土下座に限る。これを十数分繰り返した後でようやく僕は落ち着きを取り戻す。

「あ、あの、本当に僕は助かるのでしょうか？」

「うん、そうだよ？」

「あ、それよりさっきの魔力は君の？」

「ハイ、多分そうだと思います。」

「だったら貴方を管理局で保護します」

我が世の春が来たアアアアアアアアアア！！

「是非！とも！！お願いしたいです！！！」

俺はそのままやしを回収して管理局の本局に向かう事になった。そんな時に魔王様は僕に聞いてくる

「あ、そうだ、君って名前はなんて言うの？」

あ、そういえば僕名前付けてなかったな。前世の名前じゃなんか「サクヤ・イザヨイです。」

うん、東方なんだなこれが。理由？思いつきだけど？まあ顔は結構似てる方だしね？

と言う事で着きました、管理局。そして俺はまさかの機動6課で事情聴取をされる事になった。

因みに聴取の相手は努力の天才ことティアナさんだ

「でなんでサクヤちゃんはある所に居たの？お母さんとお父さんは？」

「えっと、単に住居と食料が無かったからで、両親は既に死去します」

「……………そう、で貴方は魔導師になる気はあるかしら？」

「うーんと、衣食住が保障されるなら？」

「どうして疑問系かは聞かないとして、衣食住は保障できるわ」

「だったらお願いします！！」

「え、ええ。それじゃあ私は部隊長に言ってくるわね」

といってティアナさんは部屋から出て行く。そして数分が経ち三人の女性が入ってくる

「へー、君があのとんでも無い魔力の持ち主うちゅう子か」

現れたのはあの豆狸こと八神はやてさんだった。てか今気付いたら金髪の人ってフェイトじゃん！？

「えっと、あの？」

「ああ、すまんかったな、うちの名前は八神はやてって言うんや。宜しくな？サクヤちゃん」

「あ、はい。」

「宜しくねサクヤちゃん」

「宜しくサクヤ」

「はい、宜しくお願いします。」

てか皆なんでちゃん付け？

「あの、何故僕の名前はちゃんなのでしょうか？」

「何故ってそりゃあサクヤちゃんって女の子やろ？」

「いや、僕は普通に男ですよ？」

「へ」

「へ？」

「「「えーーーーー!!!!!!」」」

「うえっ!？」

とまあテンプレ的な驚かれ方した後俺は魔力を測ることになったのだが

「予想外やな……」

「うん……」

「そうだね」

結果ランクはEXらしい。それとさつき気付いたのだが僕のポケットに黒い宝石が付いた指輪と手紙が入っていた。手紙には『デバイスは入れといたぜ!!好きに使ってくれ!!by神様5』
神様5って誰だよ……てからってまだまだ居んのかよ……

と俺は軽く人生に挫折しかけていた時に所謂念話が掛つてきた

『問おう、貴方が私のマスターか?』

「セ。バー!？」

『冗談だ』

「冗談かよ!？」

『それはさて置き。とりあえず貴公がマスターで良いのだな?』

「あ、うん。名前はサクヤ・イザヨイだから」

『それなんて東。?』

「うるせー!!そうだ、セットアップって出来る?」

『勿論。因みに我は超高性能だぞ?』

「ほう、してどんな機能が?」

『MS系統は全てインストールされている。MAは出来るが魔力が超無くなるから気を付けろよ』

「マジ!?てことはスローネツヴァイとかは!？」

『ふんサクヤよ?我を誰だと思っている?我だぞ?故に可能だ!!』
よつつつつつつつしゃーーーーー!!!!!!

「んじゃあ、早く早く!」

『その前に我に名前を付けて欲しいのだが』

「んじゃあガンダム繋がりでヴェーダで良いんじゃないか？」

『ふむ了承した。ではサクヤ行くぞ？』

「おう！逝くぜ（誤字に在らず）！ヴェーダ！」

『「セットアップ！！！」』

思えばこの時何故こんな所でセットアップしたのかは分からないが、数十分後の俺は直ぐに今の俺を殴り飛ばそうとするだろう。

ガチャ

「テストロッサ、例の書類だが

バトルジャンキー
ほう」

そうここは6課の隊舎の中。つまりはこの戦闘狂がうるついている場所でもあるのだ。で、そこに見知らぬ奴がバリアジャケットを展開していたらこの人はきっと――

「貴様、私と勝負しろ」

――なんて言い出すのだから。

あの、ぼく、転生しました……………物凄く不幸ですけど……………（後書き）

正直言うと、駄文だなーと感じております。

そして見てくれる方には多大な感謝をしております更に感想をくれたら
作者は狂喜乱舞してしまいます。

と思っていたら、早速感想が！？菊ポン様本当にありがとうござい
ます！！作者は土下座のやり過ぎで最早頭の原型を留めておりませ
んがそれでも感謝し続けます！！

といつかこの展開は急すぎると思う……（前書き）

始めに言うておくと物凄く急展開になっていきます。それと主人公はアンチ管理局のサイドになると思います。

それでもオツケーというアフリカ大陸位の心の器を持つ方はどうか応援してください。

といつかこの展開は急すぎると思う……

「やめて！」

「近寄るな！」

この二人は？

「サクヤ！やめなさい！」

ああ、思い出したお母さんとお父さんだ

「サクヤ！」

でも何故僕はこんなにも拒絶されているのだろうか？

「寄るんじゃない！こっちに来るな！」

それはきつと僕が異常だからだろう。

僕は望みもしない転生と天性を手に入れた。でも所詮力は力、何時だって人を傷付ける道具でしか無い

だからこの人達は僕に傷付けられると思って僕を遠ざけているんだ。だから僕に構ってくれないんだ。

だからこの人達は死んでしまったんだ。

僕は何もしてないのに、何もしないのに、皆僕から遠ざかって行く。そうか分かった、僕は生まれてから死ぬまで絶対に――

「…………気分悪い」

僕は目を覚ますとそこは知らない天井だった。まあ簡単に言つと僕は負けたのだ、シグナムさんに。

あの後僕はシグナムさんと模擬戦をして完膚なきまでに叩き潰されて気絶したんだつたと思う。

いやーそれにしても流石原作キャラ。強いね、紫電一閃に至つては見えなかったもん

『当たり前だ、何故なら私の肉体強化のバックアップとファングの制御とかしてなかったからな』

「なんでしなかったし……」

『面倒だからな』

「はいはい、そうですか」

取り敢えず僕はちよつとやる事が在る為管理局を出て行く事にしよ

うと思ってる。ん？なんでかって？

いやー夢を見てる時にちよつとやる事を見つけてね。なーに唯の転生者の集会みたいな物さ

「さ、行くかな。ヴェーダ、集合地点までの転移を頼めるか？」

『ああ任せておけ、管理局への隠蔽工作等はしておくか？』

「ん、頼む」

そして僕はここから転移して管理外世界への転移を行う。展開が急すぎてちよつと着いて行けないと言うその君！今はこんな感じだ！

・僕が管理局に保護される

バトルジャンキー

・戦闘狂との対決で叩き潰されて僕気絶

・夢の中で同じ転生者から集会に参加を促される

・集合場所に転移する

こんな感じだ！うん、よくわからんな。

「と、着いたか？」

『座標地点へのズレは1mとも無い。流石我だな。』

そんなこんなでやって来たのは惑星『グラール』だ。ここはまだ管理局が見つけてない世界の一つでもある。辺りにはビルが所狭しと建っていて数で言えば東京都に建っているビル全てをここに建てたのでは？という位の数だが、その全てが外装は剥がれ鉄骨は剥き出しになってどれも本来の機能を有していない様だった。

「君がサクヤ君かな？」

「へ？」

僕は後ろを振り返るとそこに居たのは見ただけで安心しそうな人だ

った。巫女服とかじゃなくてジーパンにカッターシャツだけど。

「えっ………」

「失礼、私の名前は中央定だめ。」

「定ちゃんて良いのかな？」

「好きに呼んでくれて構わない。それより君の能力を教えて欲しいな」

そついうと定ちゃんは目をキラキラさせ始めた。なんか言った瞬間キスされそうだと、まあ大丈夫だと思うけど

「確か『何でも出来る程度の能力』だったと思います」

「ふむ、程度が付くという事は、東方の能力を元としたオリジナルという事で良いのかな？」

「オリジナル？」

「あつと、知らないか、先に言うと私の能力は『大嘘憑き（オールフィクション）』という能力だ。」

「それって、あの漫画の？」

「そうだよ、要は漫画やアニメ等のキャラクターの能力を元にした能力を『偽物』といって君みたいな元が存在しない完全オリジナルの能力を『オリジナル』というんだ。」

「成る程、でオリジナルと偽物に何か違い等は在るんですか？」

「まず決定的に違うのは力の強さだ。例えば君のオリジナルには私達の『偽物』の力が何人束になっても勝つ事は出来ないんだ。」

「と言う事は、オリジナル＞偽物って事で良いんですか？」

「基本的にはそれで構わない。でも必ずしも偽者は本物に敵わない訳じゃない。本物が偽者に罠に掛ったり奇襲を受けたり単に戦闘経験が無くてサンドバックにされる事だってある。それに原作キャラには世界の修正力という途轍もない力のバックアップが存在する。だから原作キャラにはどんなチートを持っていようと私等は敵わ

ないのさ」

「だから僕はシグナムさんに勝てなかったのか……」

「そうさ、現に彼女の斬撃は見えなかっただろう？ 実際は目に追える速度では在るけど私達にはそれが見えないのさ」

なるほど、つまり僕が原作キャラに勝つには世界に勝たないといけないのか

「それより私達の秘密基地に案内してあげるよ」

「ああうん」

く少年少女移動中く

「着いたよ」

歩いて数十分、結構遠かったぜ。着いた先のビルは何故か他のビルと違って綺麗だった。階数は十階位は在る

「あの、定ちゃんどうしてこのビルだけは綺麗なの？」

「ん？ ああこれ？ まあ秘密基地位は立派にしたいからね、私がビルの損傷を『無かった』事にしただけだよ」

うおおやっぱ便利だなそのスキルは。てか僕のスキルって何でも出来るって事は他のスキルのコピーとか出来ないのかな？ でも空は飛べないしな、制限とか限度はあるって事か。

僕と定ちゃんはビルの中に入る。元はどうやらマンションらしい。そしてエレベーターに乗り十階の所で降りて『1010号室』の前で止まる。てか電気通ってるんだ

「ここが私達の部屋だよ」

中には僕と定ちゃん以外に4人の人達が居た

「紹介するよ、一番右端に居る子が東野湊ちゃん（とうのみなど）で隣の子が南瀬乙ちゃん（みなみせおと）でもう一つ隣が西野篠ちゃん（にしのにし）で最後が北井竹刀ちゃん（きたいしな）だよ」

「よろしくね」

「…………ふっ」

「よろしくですー」

「あんまり私に期待しないでね」

うわー、何かなー、名前に関しては何も言うまい。駄菓子菓子、二人目、貴様なんで僕を見て鼻で笑った？てか4人目、名前がちよつとアレだろ。あ、名前に関して言っちゃった。じゃあそんな時にいう事といえばこれだろ

「うん、よろしく。」

その後は細かな自己紹介等をした。何でもこのマンション（マンション名は安心アパート）の電力は全て湊ちゃん的能力による物で食料や生活品の創造は竹刀ちゃん、家事全般は篠ちゃんが担当らしい。で乙ちゃんはNEETまっしぐららしくて皆困っている様だ。それと定ちゃんはこの東西南北ちーむのリーダー

そこでふと僕は疑問に思った事を定ちゃんに聞いてみる

「そっぴやこのちーむって何すんの？」

そして定ちゃんは僕の言葉を聞くと笑いながら行ってくる

「管理局と管理世界を滅亡させる事かな」

というかこの展開は急すぎると思う……（後書き）

どうも。相も変わらず駄文です。えーと急展開すぎて着いていけないと思いますが何とか頑張っつけて着いて来て下さい。

後ペースとしては一週間に三丁四回程投稿できればと思っております。

それとオリキャラとオリジナルの能力を感想にて募集したいと思います。ていうかオリキャラの名前とかが全く思い付かないのでどうか読者様の頭脳をお貸しください。

そして…伝説へ…

「バスタアアアアアア！！！！！！！」

やあ皆、僕の名前はサクヤ・イザヨイ、この小説の主人公かも知れない男さ。（メタは駄目BY作者）

なんだよ釣れないな。おっとそんな事より今僕の状況は非常にまずい、どの位まずいかと言うと凄くまずい。良く分からないと思うが僕は今死にそうだ。何でこんな事になったかと言うとそれは一時間前に遡る。

（回想）

「さて、自己紹介も済んだ事だし、サクヤ君には早速仕事をして貰おうかな」

と言つて来るのは我等東西南北ちーむのリーダー、定ちゃん。いやー何時見ても安心しそうな顔だよ

「別に良いけど、何をするの？」

「何簡単だ、サクヤ君にはこれから戦力を確保して来て欲しいだけさ」

「戦力つて、他の転生者達つて事ですか？」

「そ、じゃあ逝ってもらうのは管理外世界の地球だ」

「なんか文字が違う気が………まあいいや、で地球の何処なんですか？と言っかなんで地球？」

「地球の海鳴市と言う所は知っているかな？」

「はあ、まあ、確か主人公の出身地ですよな？」

「そう、そして大抵の転生者つて言うのはハーレムやら俺の嫁やら

言い寄って来るんだ」

「成る程、だから主人公の出身地、地球の海鳴市に寄って行くんですね」

「まあ、そう言っても狙いはアリサ・バニングスと月村すずかの2名しか居ないから探すのは骨が折れるよ」

要するに面倒な事は新人である僕に任せて楽しようって訳か、意外と酷くないか？

「……………わかりました、転生者探しして来ますよ」

「助かるよ。多分アリサかすずかのどちらかに接触すれば一匹か二匹は釣れると思うから」

「匹って……………まあ分かりました、一応聞きますけど連れて来る際に抵抗して来たら？」

「殺してしまっても構わない、それは後で『なかつた虚構』事に出来るからね」

まあミッドとかじゃ無くて地球を選んだんだ、きっと平和主義の間しか居ないだろう。

— そう思っていた時期も在りました

実際地球に行つて中々の魔力を持っている奴を発見して事情を聴こうとしたら

「チツ、管理局か!？」

行き成り魔力弾をぶつ放して来ました

「ちょ!待てよ!僕は君と話がしたいだけだ!」

「へっ!何が話をしたいだ、テメエら管理局のやってる事は全部知つてんだよ!」

なるほど、管理局に対して反対意識を持っているって訳か。使えるかも。

「だから僕は管理局じゃないって!」

「嘔吐きやがれ!!原作を見てる俺様にはそんなの通用しねえぜ!」

おもつくそ原作言ってますやん!?

「結界張つてなかったらそんなの言っちゃいけないぜ!!」

一応言つておくが、僕は戦っている様に聞こえるけど実際は唯魔力弾を避けてるだけだよ?もう1つ言つておくとして避けてるだけであつて反撃は出来るからな?本当だぞ?別に弾の数が多すぎて避けるので精一杯って訳じゃないからな?

「避けんな!!」

「避けるでしょ!?!」

「和樹!!」

避けるの繰り返しを行っていると後ろから別の声が聞こえた

「村田！！」

振り返ると銀髪銀眼のイケメン太郎が居た、てか良く見ると彼も赤髪
のイケメン君じゃん。よし、容赦はしない。

「どうしたんだ和樹！」

「アイツは管理局だ、また俺達を引き込もうとしてるんだ」

「糞、またか、幾らSSSランクのオリ主だからってこつ何回もし
つこいとイライラするな」

「ああ、やっちまうか？」

うんマジで容赦しない、超ムカついた。てか僕って自分の事オリ主
って言う奴は大嫌いなんだよね

「行くぞ！」

「応！」

「全壊全倒！エンペラアアア……」

「出力最大！ブレイドオオオ……」

いい大人が凄い厨二全開な事を言っちゃって、恥かしくないのか？
ってなんかやばくない？片方の魔力が魔王様のSLBの威力超えて
ない？

「バスタアアアアアアア！！！！！！」

———
終わった

そして冒頭に至る。

僕はその黒と白の閃光に飲み込まれていく。死んだら、てか大人気無さ過ぎだろ、19歳の大人が5歳の子供に本気の砲撃魔法を打ち込むとか頭腐ってんじゃないの。チクショウ。……ん？

僕は一向にやって来ない痛みを疑問に思っていると先に声を上げたのは村田？の方だった

「馬鹿な……俺達の本気の砲撃魔法だぞ？」

「ん？どうやら僕は無傷のようだね？いやはや自分でもこれはチートボデイだと思うよ？」

「くそっ！だったらもう一発やってやる！」

「和樹！俺もやるから俺の疲労も『なかった虚構』事にしてくれ！」

およ？どうやら和樹って男の方の能力は定ちゃんと被ってるみたいだね

『ああ、ソイツ等はいらないかな。欲が強すぎる』

そう思ってるのと定ちゃんから念話が届いてくる

『どして？二人共中々の魔力と威力を持ってると思うよ？』

『ソイツ等は絶対にハーレムを狙ってるからね、恐らく主人公達も対象に入ってる筈だ、そうすると裏切る可能性が極めて高くなる』

『管理局には反発感を持ってる様だったけど？』

『ま、実際の所は唯単に私はああいう自分の事をオリ主だなんて言

つてる奴が気に食わないだけなんだけど」

『それは同感、じゃあ殺つてもいいんだね？』

『寧ろお願いしたい位だよ。』

そう言つて念話は切れた。いやーどう調理してやろうかな？

「さーで、ヴェーダモードをスローネに変えて」

『ふむ。了解した』

僕がヴェーダにそう言つと体が光に包まれてやがて光が止むとそこにはスローネツヴァイの装甲に身を包んだ姿がある。

「いやーこれで二回目だっけ？」

『ふむ、確かにこのモードは二回目だな』

実を言うと僕はこのスローネツヴァイが結構好きだったりする。まあ〇〇系は結構好きなのが多いんだけどね

「な！？それは、まさか！」

「もしかして、お前も？」

二人は気付いたのか驚きの表情を浮かべている。まあそうだろう、自分達が主人公だと信じて疑わなかったのに目の前にはもう1人の主人公が居るんだから。といっても僕はこの小説の主人公u（メタは駄目By作者）なんだよるせえな。まあいいや、とにかく僕はこいつ等をぶっ殺す事になっている。よーしお兄さん頑張っちゃうぞ

「さーで、準備はいいですか？自称オリ主さん？（笑）」

「ふざけやがつて！！」

「和樹！一氣に決めるぞ！」

またまた五歳児相手に卑怯な手を使う和樹（笑）さんと村田（笑）さんの二人。まあこの機体は一对多の戦闘でも平気なんだけどね。

「んじゃま、とつとと殺りますか」

——俺達の戦いはまだ始まったばかりだ!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6143z/>

転生先は.....リリカルでマジカルなの.....

2011年12月27日01時59分発行